

## 源流

静けさのその果てに充溢する玉の水滴  
埋葬された時制を覆う天蓋の下

黙禱を捧げ蒼の原景に佇む一柱の父  
流れる流れの流れぬ静謐な深みその  
眼差しに苔むす倒木の腐朽を見守る  
その焦点に結晶される一滴の光芒は  
腐植土の堆積する葉脈の座標と結ぶ

原初の言葉が託された光儀すがた  
光の回帰する動ぜぬ極北へと  
枯渴が無窮の問いを発する処

問いは垂直に上昇する言霊  
預言は下降する諧調の中に転調を繰り返し  
緑から紅へ眠れる光を纏い  
散り敷く溪谷に別離の華やぐ  
音節の途切れに枯れた言の葉を脱ぎ捨て  
空白を抱いた裸の樹木は天に向かい  
托鉢に立つ僧の光儀で耳を澄ます  
天に瞑目する墓標に朝の香が焚かれ  
背に負う光が覚醒の鈴りんを打つ時

冬を迎える薄い朝日にも澄明な光彩は  
深い陰影を流れ去る水面に刻むのです  
その心象を忘却の川に

堆積する枯れた言の葉を千々に  
波間に揺れる空の蒼へ返し還し  
溪はイタコの口寄せに餌を返し反し  
言の葉が託した白い遺志を招魂し  
裸木の空白を埋めると申します  
死は優しい 生もまた優しい  
生は空しい 死もまた空しい  
生と死と 光と闇と  
その言の葉の裏と表とは

暁闇を耐えて待つもののある眼差し  
その奥深く宿る言葉が胎動と共に光芒を発し  
無辺の玉となって始まりと終わりを結び  
初めての重力に落下を委ねたたまゆら  
創造は鳴動する

湧き出る希求は預言を成し遂げる驚喜の玉  
己が原初を遙か極北への引力に問い  
枯葉の落下を見送り

またの季節を見据える  
一の充実した芽吹き  
その回帰こそは

一柱の父が立ち続ける巖  
完結した玉に漲る一滴の太陽は  
いやさらなる輝きを増すように  
原初の言葉は在り続けるのだ  
もし夜の闇に落ちる光芒を見いだすなら  
何をためらうことがあるう  
わたくしはその川を溯る鮭の群れとなる  
委託された言葉を嗅ぎ分ける鮭となる  
そうしてわたくしを回帰する

約束された源流へ  
登り立つ一柱の眼差しとなって